

感情・認知機能におよぼす他者・モノの影響

吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)

■プロジェクトの目的

他者に見られることや他者の存在によって、人のこころの状態や行動は大きな影響を受ける。それは、目の前にある課題に対する集中力を低下させるといった負の影響を及ぼすこともあれば、逆に注目されることによって認知機能が促進され、課題の遂行成績が上がる場合もある。また、仏像のように、実際の人ではなくモノであっても、その存在が人の注意をひきつけ、ときには畏怖や安堵の感情を引き起こして、人の認知、感情、行動に持続的な影響を及ぼすことがある。さらに、心理臨床のカウンセリングでは、クライアントの描画や箱庭作成過程を「見守る人」の重要性が、古くから経験的に知られている。このプロジェクトでは、こうした、人のこころや行動のさまざまな側面に及ぶ他者・モノの影響について、認知科学、臨床心理学、リハビリテーション学などさまざまな視点から具体的に明らかにすることを目指している。以下に紹介するのは、「課題に直接関係のない、周辺にある笑顔が、ターゲットの検出と判断を、非常に早い時間帯で促進する」ことを実証した認知科学分野の研究である。この研究は上田祥行研究員が担当した。

■周囲にある笑顔が

パフォーマンスを高める

パソコンを用いて視覚探索課題を行い、モニターの周辺部に提示される、課題には無関係な表情写真が、視覚探索課題のパフォーマンスにおよぼす影響を調べた。今回用いた視覚探索課題は、モニター画面の中央部に提示されるたくさんのLの文字の中からTの文字(ターゲット)をできるだけ早く探す、という課題で、実験参加者は、ターゲットを見つけたらすばやく反応キ

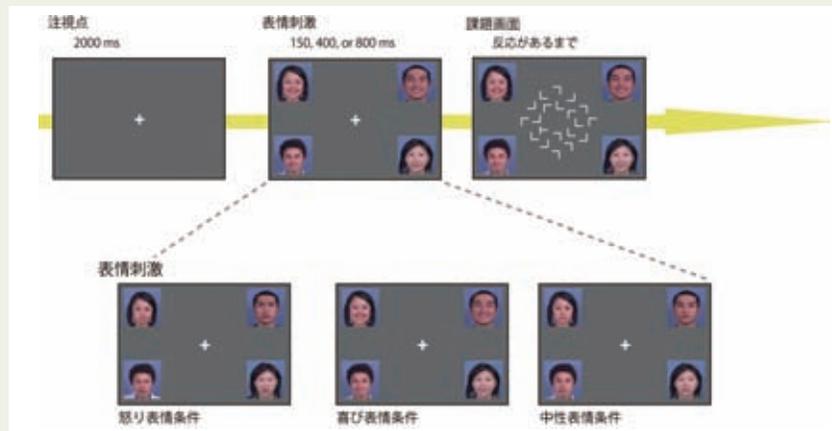


図1 視覚探索課題の1試行の流れと各条件の模式図

ーを押すように教示された。

この実験のポイントは、視覚探索課題の刺激が提示される前に、モニターの4すみに表れる、怒りや喜び、あるいは中性の表情写真にある(図1)。これらの表情写真は、課題とは直接関係のない情報なので、ターゲットを素早く見つけて反応キーを押すためには、写真を無視してモニターの中央部に注意を集中する必要がある。このとき、表情写真はターゲットに対する反応時間にどんな影響をおよぼすのか、単純に考えれば、課題に対する注意を逸らすような周辺の表情写真は、反応時間を「遅くする」と予想されるだろう。

では、結果はどうなったのか。図2は怒り、喜び、中性の表情写真が表れる、それぞれの条件での視覚探索課題の反応時間で、数値が小さいほど課題に対するパフォーマンスが効率よく実行できたことを示している。図2をみると、探索刺激よりも800ミリ秒前に、喜びの表情写真が提示されたとき、反応時間が短くなっていることが分かる。こうした促進効果は、怒り表情や中性表情ではみられない。この結果は、周辺にある「喜び表情」、つまり知覚者に快の感情を喚起させる表情が、800ミリ秒というごく短い時間で、注意のプ

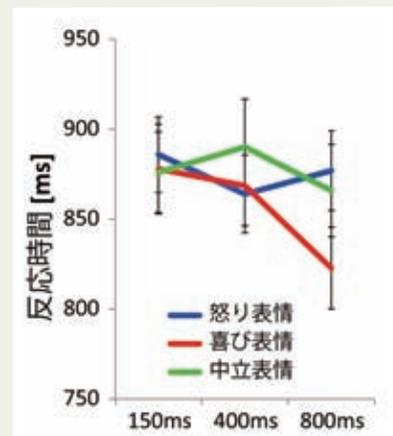


図2 視覚探索課題の反応時間

ロセスに促進的な影響をおよぼしたことを示している。

当初、課題に無関係な周辺の表情写真は、課題に対する注意を逸らし、パフォーマンスの効率を下げるのではないかと思われた。ところが、予想に反して、喜びの表情写真は、逆に反応を促進することが分かったのである。さらに次の実験では、モザイク画像など、表情写真以外の条件も加えて検討した。その結果、喜び表情による視覚探索時間の促進は、表情以外の画像との比較でも確認された。今後、促進効果の生じる仕組みについて、眼球運動の計測結果などを手がかりにさらに検討してゆく計画である。